様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520370
研究課題名（和文）
近代文学形成期における中国古典の連続性の研究
研究課題名（英文）
On the Continuity of Chinese Literature in the formative of Modern Literature
研究代表者
加藤　國安（KATO　KUNIYASU）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：70142346

研究成果の概要（和文）：
子規文庫の漢籍や自編漢詩集の調査から、子規が生涯を通して深く漢文と関わり、その豊富な漢詩理解から自作の漢詩が創作され、また近代俳句が醸成されたことが明確となった。また『中等教科漢文読本』を中心に調査した結果、明清の散文を入り口とするという基本的な方針のもとに編集されていることが分かった。それは齋藤拙堂―三島中洲―簡野道明という、江戸後期から明治期へという一連の人脈を通して踏襲されていること。また時代が明治に変わっても、高い学識でもって古今の漢文を厳選し、これにより近代的な国民教育を実践し、すぐれた人材の育成に資せんとする顕著な意図があったこと等を論証した。
以上を総合して、明治の社会が観念的な近代西洋文学の直輸入に覆い尽くされたわけではなく、長年にわたり培ってきた豊富な漢文力の土壌の上に、東洋の豊かな人間観や調和的な自然観と親密な関係性を保ちながら、三千年の言語的文化遺産に深く繋がっていたこと。そしてそこから生まれてきた東西文化の高度な融合文芸や、国際的な運用にかなう道義・見識の形成に大きく寄与したこと、またそれゆえに文化的様性のもつ資源力のきわめて重要なことについて述べた。

研究成果の概要（英文）：
Through the investigation of the Shiki Collection and the Anthology of Chinese Poetry edited by this researcher, it was clearly found that Shiki was deeply involved with Chinese poetry and prose throughout his life, and with a broad understanding of Chinese poetry he produced his own Chinese poems and modern haiku. Also, the results of the examination of the *Chinese Classics Reader for Secondary Education* show that it was compiled under the basic principle of being an introduction to prose of the Ming and Qing dynasty. This started with Saito Setsudo and continued to Mishima Chushu and Kanno Domei, as a line of thought from the late Edo period to the Meiji era. It was proven that even when the Meiji era began there was an outstanding aim to contribute to the development of excellent individuals through the practice of modern national education including Chinese prose selected by highly literate scholars.
Looking at all of the above, the Meiji society was not entirely absorbed in the importing of abstract modern western literature, but with the rich base of Chinese literature scholarship tradition, the close relationship between rich eastern humanity and the perception of the harmony of nature was included while clearly continuing the three thousand year heritage of this linguistic culture. Furthermore, this greatly contributed to the development of the broad ethics and insight necessary for international activity, and the sophisticated blend of eastern and western culture in the arts. Considering this, the eminent importance of this as a valuable source of diverse culture is also discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：中国文学・明治時代・比較論

１．研究開始当初の背景

近代的中国学の創始者の一人青木正児は、中国の近代は西洋の価値観と異なってもよいとする鋭い洞察を持っていた。これはすなわち近代の形は西洋一辺主義によるのではなく、世界の地域により多様な有り様が適当との認識の現れだった。ここに多文化世界の萌芽が見られる。青木にとって中国の近代化は無論推進すべき重い課題ではあったが、前代との不連続な関係を断行することにより成就することでもなかった。逆に西洋型社会を志向するほど薄弱化する他種の価値的文化様式について、むしろそれぞれの土壌に育まれた個性に即して追求されるべきと考えたのである。グローバル化が進んだ今日、近代西洋の単一的かつ均質的価値観による世界像はもはや貧困に映る。むしろ世界各地に根を下ろした個別文化の多様性こそ貴重になってきた今、青木のこの豊かな東洋の過去への賛歌的視点は、中国学者であるがゆえの議論として別格視するのではなく、過去の文化資源的豊穣さと潜在性を冷静に熟慮する上で、もっと枠を拡大して探求していく必要がある。

２．研究の目的

国民的位相に示現した漢文的教養の連続面を把握するには、広域に実践された文化活動・事業に即して理解されるのが最も説得的である。その一方法として、広範な影響力を持った近代俳句及び漢文教本における場合を取り上げるのがきわめて有効である。

従来の子規研究は、近世漢学からの脱却を先見的に主張し、いち早く西洋の写実性へと転進していったというのが主流だったが、じつはその根底において漢文との連続性ゆえの新たな近代性が獲得されていたことが徐々に明らかになりつつある。たとえば、謝霊運や王漁洋の理性と情趣を見事に融合した自然描写を、子規は高く評価していた。写生説と漢詩との関連をさらに詳細に捉えることは、東洋における近代文学形成のプロセスをより鮮明なものとすることが期待される。

近世から近代の過渡期における文学の刷新は文章面でも起きた。そこにもまた文化の不連続性を鋭意超克しようとする意図を見出すことができる。青木の『清代文学評論史』は、「清初唐宋八家文の流行」「中期以後桐城派其他の文説」などを掲げ、当時にあってはまことに斬新な解釈を展開している。しかし、じつはこれに先行する形で、江戸後期に斎藤拙堂「拙堂文話」が存していたことは意外に知られていない。拙堂は青木よりも早く中国散文史の全体像と明清期の散文史の中核をほぼ摑んでいた。幕末から明治初期、この「拙堂文話」がシナ学者の間でロングセラーだったことは、神田喜一郎博士が述べている通りである。これもまた近世から近代へと連続する漢学受容の一例である。それが明治期、どのように発展的に国民に受け入れられ素養として提示されていったのか。一例として国民学校における漢文教本の編集に、その痕跡をうかがうことができるのではないか。しかし当然のこと、「拙堂文話」と漢文教本の関係についての研究など、あまりに異質な連関ゆえこれまで全くなされてこなかった。拙堂の「文話」には、おびただしい典拠が引用されている。その一つ一つを確認する作業として、昌平坂学問所の漢籍調査を行うとともに、漢文教本の素材選定の実態を解明する必要がある。その先に浮かび上がってくるのは、江戸から明治期にかけての漢文受容の凝縮された中核は何だったのかという問題である。そして、そこには近代日本が背骨とした精神的支柱の実態が見えてこよう。

３．研究の方法

法政大学子規文庫及び国立国会図書館蔵子規蔵書を詳細に調査し、子規がどんな漢籍を

所蔵し、その作品のどんな部分に注目し、それをどう活かしていったのか。また子規の漢詩受容が何を意味するのか等について分析し、近代俳句誕生の背景を表層的な脱亜入欧的文学観ではなく、より子規の実態に即して考察する。

子規は、豊富な漢籍と自編の漢詩集を所蔵していた。また中には、子規の書き込みがあると想定されるものもある。このような調査を法政大学附属図書館で行い、子規文学を育てた漢詩文文化の把握に努める。

また拙堂が閲覧・引用した多数の文献について、国立公文書館所蔵昌平坂学問所の漢籍を中心に、その他の図書館も含めて秦漢から唐宋・明清の書籍を調査し確認していく。

それを踏まえて、漢文教本の先行例として宮本正貫編『中等教科漢文読本』を一例に、それまで受容された漢籍諸本のどのような作品を採択し、何を継承し、近代にふさわしいどんな新しい知性・感性を教育・啓蒙しようとしたのか。さらには東洋の文化形態のどこが西洋近代の不足を埋め合わせると考えられたのか、あるいはその問題点を融和し再統合できる可能性を有すると受け止められたのか等について考察を進める。

以上を総合して、子規の近代文学の可能性の中に、また当時の漢文教本の中に、漢文文化を国民的教養にしてどんな文化がどう新たな萌しを形成していったのか。また近世から近代への文学の劇的変化の中にあって、三千年の時間的収蔵文化財を守り抜こうとした彼らの眼差しを通して、如上の文学活動が今日の国際理解にどう貢献するのかを探求する。

４．研究成果

法政大学子規文庫蔵「随録詩集」第一編の出典調査を行い、巻頭の数首が「先哲叢談」から採られたものであることを突き止めた。それは少年期の子規が儒学には関心がなく、むしろ漢詩に強く惹かれていたことを明証するものである。内容としては、十三歳で博士となった菅麟嶼が高い学問を志して東海道を旅して京まで行くという希望に満ちた詩、またはや三十四歳で宮仕えから退き、詩人という職業に転身した服部南郭の詩などである。早年期の子規はこれらの詩の筆録を通して、自身の生き方を重ね見ていたのではないか。その成果は「子規写本「随録詩集」と「先哲叢談」」として報告した(『新しい漢字漢文教育』第 50 号)。

また同文庫の仏典漢籍を中心に調査し、子規の最後の漢詩「無題」に詠まれる「五台山下の路」について、仏教嫌いを自認していた子規が、どんな理由により五台山に言及したのか、子規文庫所蔵の文献からその根拠を割り出すべく考察を行った。これまで子規文庫の仏典漢籍について調査されたことはほとんどなく、今回、初めて未知の文献を対象に研究を行った結果、①明治二十九年に子規が言及する「親鸞真伝」の蔵書を確認し、子規が真宗に関心を寄せていた事実を具体的な形で明らかにすることができた。これとの関連で、「高僧伝」「浄土和讃・高僧和讃・正像末和讃」等の蔵書を調べると、やはり浄土真宗の内容に深く関わることが見出せた。真宗の他にも、子規蔵書には「峨山逸話」という臨済宗の高僧の書物もある。峨山は天田愚庵という子規が近代短歌の道を開拓するに際して大きな影響を与えた人物の兄弟子にあたる。また子規は明治三十四年の私的手記「仰臥漫録」の中で「峨山と丁稚の話」を記しているが、これが「峨山逸話」中にあることを初めて確認することができた。さらに、子規は当時真宗の若い僧・曉烏敏の親しい訪問を受けていたが、巻末に曉烏敏の署名入りの「訓点真宗三部経」を確認、曉烏との間に相当深い宗教的会話がなされていたことを、「訓点真宗三部経」の内容から探ってみた。こうした書物や僧侶との交流を通して、次第に子規は晩年の漢詩「無題」「失題」「病牀偶成」等において仏教に言及するようになり、ひいては真宗の故郷の五台山へ思いを寄せるに到ったと考えられる。これにより死期の迫る子規にとって漢詩文がいかに濃い影を落としていたかが明確となった。以上の成果は、「子規「五台山下の路」論―子規文庫の仏教世界」にまとめられた。

子規と漢文の親密な接点は、若年と晩年においてのみではない。その盛んな時期においてまた深い関わりが見られる。それは所蔵本『三体詩』へのおびただしい傍点に窺われる。今回は、紙数の関係で五律「四実」を元にし、傍点を打った詩句の意匠と同趣のものを子規の俳句に求めた。すると、明治二十六・七年以降の句を中心にして、相当緊密な事例が見出された。これは漢詩と俳句の間にかつて芭蕉など見られたような受動的翻案文学を脱して、むしろ言語・時空を越えて主体的な意欲に発する双方向性的な橋梁をかけんとする思いに基づくと考えられる。子規自身、漢詩・俳句ともに創作し、その間に二致なしと断言することから、東アジア詩歌圏のような巨視的詩論の先駆者として位置づけられることを論じた。

次に、国会図書館で江戸後期から明治期にかけての日本漢文の調査を行い、明治期の

人々にとって日本漢文がいかに重要な勉学の対象であったかについて研究を行った。具体的には、「大東世語」「慎思録」「初学知要」「先哲叢談」「近世叢語」等の漢籍、また雨森芳洲・頼山陽・齋藤拙堂・安井息軒らの文集をもとに考察し、それが明治の宮本正貫編漢文教本にどのような形で反映したかを具体的に調べた。その結果、ここに採択された作品が、人間の根源的なあり方を突き詰めて問い、綿密な整理と深い熟慮を重ね、文学的な芳香をもって表現しているものを厳選していることを明らかにした(「近代日本版『文章軌範』編集の情熱」)。

また国立公文書館所蔵の昌平坂学問所漢籍(内閣文庫)調査をし、斉藤拙堂が閲覧・引用した漢籍資料を確認し、それを基に拙堂の読んでいた文献の割り出し作業を行った。ことに拙堂が他に先駆けて清代初期の古文に強い関心を寄せていたことが明確になり、それが頼山陽の注目を引いたこと、またその門弟・三島中洲の明治期における明清文称揚の一因となったこと、そしてそれがやがては青木正児『清代文学評論史』へと展開していく流れを掴んだ。その成果は「明治人の清代古文(2) 」として発表した。

さらに明治の漢文教本「中等教科漢文読本」における清代古文の受容について、(1)では汪琬・魏禧・朱彝尊を中心に、(2)では方苞・劉大櫆・姚鼐・袁枚・廖燕らを中心にして、その典拠・内容・選録の意義や社会背景を考察し、またその他の漢文教本との比較、及び今日の中国の清文選集との異同について検討した。その結果、編集に際しては、和刻本のほか『国朝二十四家文鈔』『国朝古文所見集』『清名家文鈔』等を基礎にしていたことが明らかとなった。このような道筋を付けた先人を探求してみると、諸資料の中から頼山陽・齋藤拙堂に始まり、三島中洲へと続く清文重視の系譜を突き止めることができたのも、今回の一成果である。

明治の教育界は対清政策上からも清代古文を重視したが、その選択眼はきわめて卓越していた。いつの時代も変わらぬ仁徳・礼節や自然美と一体化した人道主義を旨とする内容が多いことが特色として上げられ、明治人の気骨や矜持といった国民性を育てた一因が、この漢文教本にあったことが知られるのである。

これらの検討により、明治期の人々が実感の希薄な近代西洋文学の直輸入とは異なる形で、観念論や抽象論ではない東洋の豊かな人間観や調和的な自然観の継承的発展を基盤とする、裾野の広いかつ独自の東西混合型の、それゆえにこそ内実の豊潤な近代文学を探求し得た経緯の一端を明らかにすることができた。

国民教育の普及が進むにつれ、漢文は原文そのままとしての受容は減少するが、俳句などの言語表現の奥や、社会的諸活動における審美的品位性の内面に、目立たないけれども従前よりも拡散気味に蓄積されることになったと考えられる。

三千年もの時間を一度の断絶もなく言語表現を駆使して記録し続けてきたというのは、漢文という領域に唯一の奇跡である。その文化的資源の潜在力と可能性は、多様性の均一化による人類衰滅の危機を、懸命に食い止める防御壁となってくれることが期待される。かつてのような高い漢文文化力があるわけではなくなったけれども、その命脈は広く薄く保ち続けている。もし子規がやったように、漢文を新たな文学の自覚的活法とし得るならば、国家を越えてより広範な相互理解の礎ともなり、擬制としての近代国家の障壁を越境して東アジア詩歌圏が誕生するのも夢ではない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①加藤國安、子規文庫蔵『三体詩』の意味するもの―東アジア詩歌圏の黎明、斯文、査読有、2012、pp. 13-26
②加藤國安、子規「五台山下の路」論―子規文庫の仏教世界、名古屋大学文学部研究論集、査読無、2011、文学 57、pp. 1-29
③加藤國安、明治人の清代古文(二)―卓然トシテ衆ニ顕ハレンコトヲ期ス― 、東洋古典学研究、査読有、2011、31 集、pp. 29-56
④加藤國安、子規写本「随録詩集」と「先哲叢談」、新しい漢字漢文教育、査読有、2010、50 号、pp. 225-232
⑤加藤國安、明治人の清代古文(一)―漢文教本に見る時代の疾風―、東洋古典学研究、査読有、2010、30 集 pp. 1-26
⑥加藤國安、近代日本版『文章軌範』編集の情熱―簡野道明の府師範期の歩み―、東洋古典学研究、査読有、2009、28 集、pp. 19-43

〔学会発表〕（計１件）

加藤國安、子規の「五台山」への思い～子規文庫の調査を通して～、東洋文化振興会 、2011、07、09　新日本法規出版・名古屋支社「大会議室」

〔図書〕（計１件）
加藤國安、吉川弘文館、明治時代史大辞典、
2011、第一巻、p.640

６．研究組織
(1)研究代表者
加藤國安（KATO　KUNIYASU）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：70142346

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し